野原　篠原

ＳＫリリス

①

暗かった。洞穴の奥に入るに連れて闇は深くなった。足許も見えず寒さは弥太の腹の底まで凍らせるようだった。奥へ奥へと進むが足許の感触が変化して、土が軟らかくなった。つま先が少し上がり気味になったので、土が盛り上がっているのが解った。背中で眠っていた若君の体は子供らしく温かかった。二人の体が触れ合っているところだけに温もりがあって、その他は何もかも冷たく凍えるようだった。足先が土の盛り上がったのを明らかに捉えた。弥太は立ち止まり、座り込んだ。若君が眠そうな声で聞いた。

「弥太、どうしたの。」

「ちょっとこの辺りを調べてみたいのです。暫く立っておられますか。」

「大丈夫だよ。直ぐおりるよ。重かっただろう。」

「何時までででも背負って差し上げますが、今は、ここを調べてみたいのです。」

若君は、弥太の背を降り、暗い中にじっと立っていた。本当は怖くてならなかった。寒くて空腹だったが、何も言わず我慢するしかなかった。

（弥太はずっと私を背負ってくれた。怖いなどと侍の子が言ってはいけないのだ。父上や、兄上はどうなさっただろう。）

唇をかみ、震える奥歯をかんで寒さを堪えた。弥太が暗い中で、動いていた。弥太の低いが嬉しそうな声が聞え、カチカチと音がして、目の前がぽっと明るくなった。弥太の指先に小さな赤い光りが点っていた。

「若様、こちらに。」

ほんの小さな灯りだったが、急に心強く思えた。周りを詳しく見渡せる程ではなかったが、どうやら洞穴の行き止りらしかった。土は軟らかく掘り起こしたばかりで、何のための洞穴なのかと、弥太に疑問が湧いた。寒さとひもじさを一言も口にしない若君が、弥太は愛おしくてならなかった。この数日は特に辛かった。殿の元の所領へ逃げのびたとしてもきっと追手に捕まるだろうと、処々を転々として暮してきた。都の屋敷と負け戦から逃れてもう小一年が過ぎた。なんと弥太の亡き母親の実家のあった、近江と山城の境の村に住めたらと思い、慎重に戻って来たところだった。食べ物も昨日最後の乾し米を少量若君に差し上げたきりだった。育ち盛りの若君には、何かもっと食べさせたいと思った。

衣類はとっくに食べ物に代えたので、若君とはいっても、そのあたりの子供と少しも変らない身なりになっていた。それでも、どんな時も卑屈にならず、弥太をいたわる若君が愛しくてならなかった。どれ程その言葉に励まされた事か。弥太は、今も胸が一杯になりながらも、藁の小さ

な灯りで、洞穴をよく見た。折敷の上に何か包みがあった。藁が燃え尽きて灯が消えた。手探りで包みを開けると、餅のにおいが鼻先に漂った。ここが弥太の思う通りの場所なら、水もあるはずだった。運がよければ、他にも何かもっと灯の種になる物もあるはずだ。やはり水も竹筒に入れてあった。

「若君、餅を差し上げましょう。少し堅くなっていますが、ゆっくり噛んで下さい。喉につかえてはいけませんからね。水も少しはありますよ。」

弥太がそっと手をとって餅を差し出すが、若君は口に入れようとしない。

「どうなさいました。明日も歩かねばなりません。食べなければ歩けません。」

「お前の分はあるの？　弥太は昨日も乾し米を食べなかったよ。」

若君は、餅を弥太の手に強く押し付けた。弥太は堪えられず、声を放って泣いた。若君の手から、餅を押し頂くようにして受け取った。それを小さく千切って、若君の口許へ一つ運び、自分も口に一切れ入れ、涙とともに噛み砕いた。

「私も頂きます。仏様のお恵みです。無駄にしては勿体ないです。」

若君は頷いて、しっかりもちをかみ締めた。

「弥太、美味しいね。仏様が下さったの？」

「仏様が若君をお守り下さっているのです。しっかり生きていくようにと仰せなのです。」

その時入り口近くでどたどたと足音がした。松明を持って、奥まで入り込んで来た。旅装束の田舎侍のようだった。松明を掲げて洞穴の奥を見回すと、大声を上げて入り口へと走って逃げた。

「どうして出て行ったのだろうね。」

「もし追っ手だったらと思って肝が冷えました。」

「なぜあの男は逃げ出したの。」

「意気地なしなのでしょう。若君ほど強くないのですよ。」

（ここは墓穴で、お供え物を頂いたとは言えない。きっと今の灯りで、大勢のための墓穴だとお分かりであったろうに、それにしても頼もしい事だ。子供ながらに肝の据わった方だ。なんとしてもお守りせねば。）

（ここは普通の場所ではないのだろうなあ。私たちには、もう行く所がないのだろう。）

二人は寒い夜を墓穴で明かした。若君はまだ十歳になったばかりだった。殿の末子で他のご兄弟は父君と一緒に首を討たれてしまわれた。この若君は、まだご存命だった母君の家で養われておられ、その存在その物を知る人が少なかったために、却って生き延びられたのだ。弥太は、母君の家に仕える乳母の子で、八歳上の乳兄弟だった。母君の家でずっと一緒に育って来た、仲の良い主従だった。弥太にも、今は家族がいなかった。若君を守って生き抜く外なかった。若君が心優しく、肝の据わった所を見せると、改めて弥太はその決意を強くした。夜明けの赤い光が見える頃には、弥太は若君をせかし、急な山道を歩いた。この一年程よく主人を守って生き抜いてきた。弥太にも辛い日々だった。

「弥太、もしかして、あの餅はお供えじゃないかな。罰が当たるかもしれない。」

「気がついておられたのですか。」

「そうでなければ、侍が逃げ出すわけはない。あそこには死人が埋めてあったのだろう。まだ新しい土だったから、私も本当は怖かったのだよ。」

「それは頼もしい事です。流石若君は武家のお生れ、ご立派なお振る舞いでした。あそこはかなり多くの新仏を埋葬したばかりだったのです。お供え物は仏様の下され物、強く生きよと若様に下されたのでしょう。」
近江へ抜ける杣道は子供の足には厳しかった。たとえ里へ着いても、そこに追手が来ないとはいえなかった。里の近くの山裾で、弥太はまず一人で里に入るために、若君を崩れかかったお堂に残し、下見をしに一人で出て行った。

②

若君は、もう名を薄墨と変えて近江と山城の間の里に暮していた。元服するにも侍の子らしいしきたりも守れなかったので、せめて先祖の名の一字を名乗った。
その日、元服して間もない薄墨は弥太の帰りを山の崩れかかったお堂で待っていた。山の空気は冷たく、まだ春は遠く思えた。都での暮らしを忘れ果てたと思うものの、時に山の気配には驚かされた。扉がかたんと鳴って、少しずつ開いた。弥太では無かった。薄墨は身構えた。たった一つ家の証として手元に残した小刀に手を添えた。
「もし、弟が熱を出して難渋しております。少し休ませて下さいませ。」
少女の声だった。光りを背にしているので顔は見えなかった。声には張り詰め、切羽詰った響きがあった。
「どうぞ、こちらへ。熱があるのですか。それは大変ですね。水ならありますよ。」
少年を抱えるようにして入ってきたのは、十二、三歳の少女で、少年はまだ八歳にもなっていないようだった。少年を床に寝かせると、薄墨が竹筒を少女に渡した。それを受け取るのに見上げた少女の顔に光りが当たって、目鼻立ちがはっきり見えた。美しかった。目は大きく瞳は黒く、当世もてはやされるようななよなよとした風情の美女とは違って、子供ながらりりしい美しさが、少女にはすでに備わっていた。
「ありがとうございます。太郎、お飲みなさい。」
干からびた唇に竹筒を宛がうと、少年はゴクリと一口飲んだ。
「熱は何時から出ているのですか。ここには薬もないのですが。知り合いは近くにいるのですか。」
少女は困惑し俯いた。突然膝に涙がぽとぽとと落ちたので、薄墨は驚き、なんとかこの少女を慰めてやりたかいと思った。
「知り合いはいないのです。父も母も亡くなり、弟が継いだ家も盗られました。」
少女の細い肩が震え、涙は裾短に着付けた小袖の膝に落ちた。元は綺麗な着物だったのだろうが、明らかにもっと年上の女性向けの物で、垢染みていて、古く侘しく見えた。
「お姉様、少しだけ休んだら、また歩きます。」
太郎と呼ばれた少年はかすれた声で、それだけを健気にいうと、失神したように眠り込んだ。
少女は、太郎の手を握って頬にあててまだ涙を流している。
「ずっと歩き通しだったもの。疲れたのでしょう。」
それからふと気付いたように、少女は袖で竹筒を拭うと薄墨に返した。瞳にまだ涙が溜まって

いた。頬は涙で濡れていた。ようやく声を出して言った。
「弟が目覚めるまで、ここにいても構いませんか。」
「遠慮なさる事はありません。ゆっくり休まれるがよい。」
少女は床に軽く両手をつき礼を言った。着物は埃に薄く汚れていたのに、その黒髪にも白い首筋にも、埃も汚れも少しもついていなかった。髪はつやつやと美しく、薄墨は驚きと不思議な当惑を覚えて少女を見た。改めて美しい子だと思った。
「これは弟で太郎、私はみやと申します。」
「私は、名乗るほどの者ではないのですが、皆は薄墨とよびます。」
二人は初めて正面から互いを見詰めあった。薄墨は本名明かせない事で、少女に後ろめたい想いを持った。みやと名乗った少女の方は、薄墨を見詰めると、何故か安心感を覚えた。屋敷を出て以来、初めて感じる人の温かさだった。
「空腹ではありませんか。餅と水があります。太郎殿にも差し上げたいが、まずあなたが召し上がられませんか。私はしばらくお堂の外にいましょう。」
みやは赤くなって俯いた。空腹など通り越していた。それでも、初めて会った男性に食べ物を恵まれる事が、恥ずかしくてならなかった。
「ここに水と一緒に置きます。遠慮なく召し上がって下さい。」
薄墨は、返事を聞かずに扉を開けて出て、階段に腰を掛けた。中では、かすかな音が聞こえた。いくらかでも食べてくれたら良いと思った。
「あの、薄墨様。どうぞお入り下さいませ。」
「もういいのですか。ちゃんと食べましたか。」
「はい、頂きました。甘くて大層美味しゅうございました。」
薄墨は思わず笑った。昔の自分と同じ事をいう少女が可愛く思えた。少女も薄墨の明るい笑い声につられて笑顔を見せた。
「その方がいい。いつも笑っているといい。」
その率直な物の言い様に、少女はまた微笑えんだ。
「私も故郷がないのです。お互い困った身の上だね。」
薄墨が笑いを含んだ声でいうので、みやもにっこりした。
「少しもお困りのようには見えませんが。」
「なぜかどうにかなると思えるのですよ。」
薄墨には弟を守って健気に振舞う少女に、昔の自分と弥太の姿が重なって見えた。二人は、あたり障りのない話題を選んで、幾つか言葉を交わし、暫くすぎた。太郎が、何事かつぶやいた。急いで手をとってみやが聞いた。
「目が覚めたのね。どこか痛いの。気分が悪いですか。」
「お姉様、お腹が空きました。」
少女は手のついていない餅を取り出し、小さく千切って太郎の口へ入れた。
「ゆっくり噛むのですよ。少しでも食べて元気になってね。」
「お姉様は。」
「私は頂きました。だから心配しないで。」

太郎は懸命に噛み砕き食べた。薄墨は、昔の弥太と自分の事を考えた。弥太もこうして自分を後にして、私に食べさせてくれた。どうしてもこの姉弟を助けたい。少女の空腹を満たしてやりたい。少年の飢えと乾きを和らげてやるためなら、墓からでもどこからでも、なんでも奪ってやる。太郎が、昔の薄墨と同じように、姉に少しでも食べさせようと、餅を姉の手に押し付けるのを見て、その思いを深くした。

弥太が帰って来た。鋭い目で少女と横たわっている少年を見やった。

「みや様、これが私の乳兄弟の弥太です。弥太、みや様と太郎殿だ。都から逃げてこられたそうだよ。私たちと同じだ。」

弥太は安心はしなかったが、少女の凛とした気品ある姿と、太郎の澄んだ目を見て、やや疑念を解いた。少女の名に不審を覚えたが、それは飲み込んだ。

「今はこれを召し上がって下さい。」

弥太は柿の実や、大きな柑子の実を幾つか懐から出した。薄墨は、柿の実を、小刀で小さく割り、皮をむいて、姉弟に渡した。弥太は柑子の皮を剥いた。

「ありがとうございます。太郎、おあがりなさい。」

「みや様、あなたもお食べなさい。先ほどの餅はお食べになっていませんね。それで歩けなくて、弥太に叱られても、私は知りませんよ。」

薄墨は冗談めかして、みやにいった。太郎は懸命に柿を齧っていた。冗談と声音に込められた労わりに、弥太は気付いた。

「はい。頂きます。」

みやは頬を赤く染めながら、小さく柿の実を齧った。弥太がみやと薄墨を見た。

「みや様も太郎殿も私たちと同じ身の上だよ。昔の我らと。村に来られたら良い。」

「ですが、姫様ですから。」

「お邪魔をする積もりはありませんわ。」

みやは弥太の言葉に篭った迷惑さを感じて、思わずきつい口調で答えた。

「行くあてはないとお嘆きだったでしょう。それならば一緒にこられた方が良い。皆、都を逃れた同じ身の上です。こうして巡りあったのも何かの縁です。」

みやがさらに言った。

「お情けにお縋りする積もりはありません。」

みやは、太郎の荷物に手を伸ばし、小さな守り刀を引き出した。腰の下まで垂らしていた髪を肩よりやや下で切り落とした。太郎が、あっと声をあげた。薄墨と弥太は声を失った。

「太郎、比叡のお山に参りましょう。」

「お姉様、お父様が大事にせよといわれた髪を。」

「あなたが生きてお父様の望みを叶える事の方が髪などより大事です。」

みやは男達の前で髪を高く根結いにした。太郎の着替えの指貫を引き出して、強いて男達から隠れる事もせず、小袖の裾をその中に押入れて少年の姿になった。その覚悟に感動した薄墨は、みやと太郎の姉弟を守り通すと再度固く心に誓った。みやと太郎は里のはずれの空き家に住むようになった。

薄墨の父と兄弟を殺した清盛はこの数年前、娘徳子を入内させて、世を手中に治めようとして

いた。この度は鹿ケ谷の一件で、反対勢力を一掃したという。薄墨はふと思った。（この姫と弟は、それと関わりのある者たちではないか。それなら、俺とまったく同じ身の上だ。一体どちらの姫君と若君だろう。縁は深いが、逆縁という事もある。）

③

――花見れば袖濡れぬ　月見れば袖濡れぬ　何の心ぞ…

「今様か。このごろ子供たちに教えているのは。太郎殿は踊りの名手だそうだね。妖しい程美しく巧みに歌い踊られると、皆が言っているよ。」

みやは自嘲気味に言った。

「お父様がきっとお怒りですわ。経文と勅撰集を全て暗記せよ、琴は心を尽くして習うように、太郎は漢籍を忘れずに習得せよと、いつも言っておられました。私も太郎も今様の方が好きで、舞に心を惹かれています。」

「そのどこが悪いのかな。皆喜んでいるではないか。」

「太郎には、本格的に学問をさせないといけませんもの。」

みやは敢えて薄墨の問いに正面から答える事をしなかった。

「学問もなさればよいが、好きな事をするのが一番ではないか。あなたも経より、歌の方が似合っているよ。尼さんがそんな美人ではもったいないよ。」

あくまでも冗談に聞えるように言ったが、それは薄墨の本心だった。

（お前が俺の物でいてくれたら、それだけで満足だ。）

（お父様は、生涯廃れ親王と呼ばれ、世の侮蔑に耐え、太郎に希望を託して逝かれた。お母様は気高く美しい方だった。太郎に家を継がせてさえやれたら、私はどうなっても良い。お館にもこればかりは解らない。）

「あなたの歌は胸の奥に染み渡る気がする。」

みやは薄墨に小さく微笑んでみせて歌った。何といっても薄墨は心の優しい良い男だった。辛い時期を労わり励ましてくれた、かけがえのない男だった。

…誰が袖触れし梅が香ぞ　春に問はばや　物言う月に　逢いたやのう…

「みやは誰の袖の香を聞いたのか。月が物をいうなら、俺の方が聞いてみたい。その歌は雅で、しかも情があって、勅撰集の歌より心に沁みると、俺には思える。」

みやのきりっと上げた視線をおどけて外して、薄墨は家を出がけに声を掛けた。

「弥太の所に行って来る。遅くはならない。」

みやは返事をしなかった。薄墨の他、誰の袖の香も知らない、そんな雅な遊びをする時間などなかった。

薄墨は、みやと太郎の悲願を叶えられるかもしれない計画を持っていた。

「お館、いい加減に他にも女をお持ちなさいませ。子を産んでくれて、飯をつくり着物を繕い、家を守ってくれたら、それで良いではありませんか。今では通う女もいませんね。いつまでもこの様に過ごすわけには参りません。お家が絶えます。」

月に一度は必ず弥太のいう事だった。みや以外にも女は確かにいた。弥太は知らないが、去っていくのは女達のほうだった。女達は薄墨の心が自分にない事に気がつけば、必ず去った。あの日、涙を振り払って、髪を切り落としたみやの姿が、ずっと薄墨の心を占めていた。他の女と過ごす夜は、ただ寒々しかった。太郎とみやのいる家が、必ず恋しくなる上、家を空けた翌朝は、みやの悲しげな顔をみるのが辛かった。

初めての夜、みやは嫌がるのでもなく、薄墨を恋しいと思うでもなく、ただ定めとして受け入れる様に、淡々と薄墨を受け入れた。薄墨の歓びは深かったが、みやの態度は、それ以前と少しも変らなかった。薄墨にはそれが物足りず、虚しく思えた。他の女は、薄墨の胸の空虚さを増すばかりだった。おまけにみやに対して後ろめたかった。薄墨は、やがてみや以外の女に近づかなくなった。

（太郎殿の学問か。それはせねばならないだろう。俺とは違うからな。俺が元の身分だったら、みやも俺を愛しいと思ってくれたろうか。俺を無二の者と思ってくれたろうか。）

薄墨は胸の屈託を振り払って、弥太に尋ねた。

「この頃、小松殿が贅を尽くした奉納品を作らせたらしい。それを頂こうと思う。大層な寄進をなさるそうだ。それをみんな頂こう。」

弥太は愉快そうに笑った。

「それは良い。お館、亡き殿とご兄弟の敵討ちにもなります。」

二人は不敵な笑みを浮かべた。弥太が束の間視線を落とし、意を決したか、遂に言った。

「みや様と太郎様の父君は、昔の帝の八宮様だったようです。ご病死ではありますが、鹿ケ谷の事件に連座したと疑われたようです。四位の忠度殿に領地を奪われ、屋敷も没収された事を恨みに思い、遂に床に就かれ、身罷られたのです。それであの時都から逃れて、太郎殿を比叡山に送り届けようとなさっておられたのではなかろうかと思います。ご本名を晶子様、尊雅（たかまさ）様といわれます。まだお明かしなさいませんか。」

「それならば、俺の事も敵の片割れと思われるかもしれない。みや殿とは姫宮様の事だったのか。それはまたお気の毒な身の上だなあ。」

「確かに、敵の一人と思われるかもしれません。まだあの年頃では詳しい事はお分かりではなかったでしょう。お館はとっくに聞いておられるかと思いましたが。」

薄墨は、視線を落として小さく首を振った。

「昔の事は捨てたらよいのだ。俺のように、只の男として、只の女として生きればよいのだが、みやにはまだ了見が付かないらしい。」

弥太には薄墨の想いの深さが解った。

「今は、小松殿の宝物を頂く相談をしよう。みやと太郎殿の歌舞で、屋敷に入れば、二人も忠度殿にも会えるかもしれない。その先は二人がしたいようにすれば良い。上手くすれば重盛殿にも直接会えるかも知れない。」

「お館は、お二人がどうなさっても構わないのですか。」

「ずっと前から二人を守ると決めて来た。何があってもそれは変らない。それに俺も敵討ちの真似事ができる。」
弥太は大きく頷いた。薄墨となっても、侍の心が残っているのが嬉しかった。

④

……仏は常にいませども　現ならぬぞあわれなれ
人の音せぬ暁にほのかに夢に見え給う　……

少女たちが手の動き、足捌きを揃えて、まだ高い子供の声で歌う。小松第の庭に急ごしらえの舞台があった。広大な庭のあちらこちらで大きな松明がたかれ、足許には灯りが揺れていた。舞台は多くの燭台に照らされて、幽玄な雰囲気に満ちていた。一際姿の良い舞人が中ほどに現れて歌い始めた。

……我恋は　水に燃え立つ蛍々　物いわで笑止の蛍　……

少女達はその舞人の後に繰り返す。「笑止の蛍、笑止の蛍」。少女と見えたのは妖しい程に美しい少年だった。揃いの白の水干、赤い袴を着ているが、その少年だけが特別な衣装を着ているように、際立って美しかった。少年の周りの灯りがキラキラとこぼれかかるかに見えた。正面の席には、当主重盛、歳若い法体の貴人、更に二人の隣に、貴人と親しげに歓談する侍がいて、薄墨より少し年長の三十半ばほどかと見えた。雅な装いで、位高い者のみがもつ威厳が自然に備わっていた。
「兄上、見事な歌と舞でございますね。法親王様もお気にいられた様子です。」
法親王と呼ばれた客人は、少年に目を奪われて何も耳に入らないようだった。
「確かに。中宮様にもお見せしたい物です。どこで知ったのですか。」
「屋敷の者が面白い踊り手がいると申しましてね。法親王様がお好きではないかと思いました。ああ、兄上、これからですよ。一番の見物は。大変な美女がいるのだそうです。その歌がまた殊に素晴らしいといいます。」
少女たちが舞台の両側に控えて膝を着いた。黒い高烏帽子、白の水干、緋色の長袴に黄金の太刀を佩いて、美しい女が真ん中に立った。手にした扇をかざして歌いだした。

……君が愛せし綾藺笠　落ちにけり落ちにけり　賀茂川に　川中に
それを求むと尋ぬとせしほどに　明けにけり　明けにけり
さらさらさやけの秋の夜は……

扇がひらひらと舞い、笠が水に落ちる様を表した。少女たちが立ち上がり、女の周りで「さらさらさやけの秋の夜は」と繰り返し歌い、ぐるぐるとまわった。女は大胆にまた優艶に歌い、男

達の視線を集めた。歌と踊りは不思議な程気品高く、見る者を魅了する、今まで見た事もない新しい物だった。

…なにしょうぞ　くすんで　一期は夢よ　ただ狂え
一期は夢よ　ただ狂え　……

人々も手を叩き拍子をとって、座は賑やかに乱れた。忠度は女に心を奪われた。音楽も歌もしだいに穏やかになって、少女たちが一人ずつ舞台を降りていった。舞台には女一人が残り、正に下りようとしたその時、忠度が声を掛けた。

「舞姫君、もう一曲所望。」

女は頷き立ち姿を整え、忠度を臆する事なく見返して、歌い始めた。扇は閉じたまま、あらぬ方を示し、視線を遠くに遊ばせ、先ほどとは違った静かな舞だった。

…　月影の入るを限りに分け行けば　いづこかとまり　野原篠原　…

女は忠度にひたと視線を当て、下の句を二度繰り返し、歌い納めた。それは妖しく凛々しく美しかった。黒い瞳が忠度を激しく誘惑した。女はするすると舞台を下りた。はっと我に帰った忠度は、傍の従者に女への文を持たせ、支度部屋へやった。

（……かからじと思いし事をしのびかね　恋に心をまかせはてつる……
初めて会った方をこれ程恋しいと思うなど、我ながら驚いています。恋に心をまかせてしまった。あなたゆえです。）

みやは文に心が揺れた。その心の乱れが、薄墨に対して後ろめたかった。

（お目にかかって所領を返して頂けるようにお願いしたい。あの方ならばきっと聞いてくれるだろう。雅で男らしい方のように見えた。そのために会うのだ。）

みやは、それが誰に向かってする言い訳なのかと思った。

（…梅花は雨に　柳絮は風に　世はただ嘘に揉まるる…お言葉がたとえ嘘でも、嬉しゅうございますわ。）

ほんの走り書きのように書いて使いに渡した。

（手習いに心を入れよと、お父様がいわれたのは、この事なのね。）

小松第の人々の豪奢な暮らし振りにも、忠度その人にも気持ちが乱された。もし父が存命ならば、自分もこのような暮らし方をして、忠度とも尋常に巡り会っていただろうか。忠度との出会いがこうだった事を恨めしく思えた。太郎の弾んだ声が聞えた。

「お姉様、法親王様がお呼びになっています。行っても構いませんか。」

「良いですよ。元々親王様は母君の遠縁の方です。卑屈な気持ちを持ってはいけません。頭を挙げているのですよ。」

太郎尊雅は、しっかりと頷いて、迎えについて行った。薄墨の姿が先ほどちらっと庭木の間に見えた気がした。弥太の支度が出来次第、京の借家に子供達を連れて戻らねばならない。みやは何かが物足りず、心残りな気がした。

池のほとりの小さな多宝塔の陰から、薄墨はみやの舞と忠度の呼びかけを見ていた。二人の間に手で触れられるような衝撃が走ったのを感じて、胸が痛んだ。そのまま闇に紛れた。薄墨の名は、墨が闇に滲み込むように人知れず屋敷に忍び込む事から付いたのだった。この夜の薄墨は、強い怒りに突き動かされた。

（父を殺したのは清盛殿。俺が名を捨てたのは、この一族のためだ。みやと太郎殿が流浪せねばならなかったのも、この一族のためだ。）

薄墨は、心に怒りを抱えて屋敷の中に消えた。弥太はその怒りの気配を察知し恐れた。早くみやと太郎を借家に連れ戻らねば、何かよくない事が起こると思った。

「みや様、みなの支度ができました。」

「太郎が法親王様の元に伺っているので、待ってやりたいの。先に子供達を連れて帰っても良いのよ。私と太郎は後から帰ります。」

「太郎様には、また別の車をよこしましょう。みや様は先に子供達とお帰りになるのが宜しかろうかと思います。お館も安心なさるでしょうから。」

みやの心残りな様子に、弥太は懸念を更に深くした。先ほど薄墨から感じた強い怒りと、今のみやの逡巡には、何か深い関係があるだろう。弥太はみやの帰りを更に促した。みやは、さらに躊躇った。そこへ忠度の文がもたらされた。

（……夢かうつつか今宵定めよ……夢の中か、前世できっとあなたに出会ったのでしょうか。どうしてもこのままお別れできそうにありません。）

古歌に胸が震えた。みやの指の震えを見てとった弥太は、もう遅いと感じた。みやが文を畳み終わる前に、忠度その人が廊下を渡って来た。弥太に向かって、いかにも貴人らしい有無を言わせぬ口調で命じた。

「舞姫君は、私がお送りしよう。そなたは他の者の世話をするがよい。さあ、舞姫君、こちらにおいでなさい。」

風のようにみやを攫って、忠度と二人を乗せた車が弥太の目の前を去った。

「ようやくあなたを一人占めできた。名を教えて下さいますか。」

「あなた様は。」

「私は平忠度、歌を知っておられたので、もうご存知かと思いましたが。」

「今はみやと名のっておりますが、八宮の娘で晶子、弟は尊雅と申します。」

みやは真っ直ぐに立ち向かう事にした。忠度に駆け引きをしても無駄だと思った。

「それは無礼を致しました。なぜこのような事をなさっているのですか。」

みやは素性を明かした以上、もう後に引けないようにと、自分を追い詰めた。

「あなた様にお目にかかりたかったのです。」

忠度は、楽しげにからからと笑った。

「信じられませんね。本当ならば嬉しいが、本当はなにゆえですか。」

「本当にそうなのです。お目にかかってお願いしたい事がありました。」

「では、私の屋敷でゆっくり伺いたいと言ったら、一緒に来て下さいますか。」

みやは頷いた。どこへでも行かねばならないのか、自ら行きたいのか、自分でも解らなかった。ただ自分がそうする事だけは解っていた。

「参りますわ。」
忠度の袖がはらりと舞って、みやの肩を包み込んだ。袖は良い香りがした。
薄墨は、車の出て行くのを闇に潜んで見送った。みやを失ったと思った。

⑤

「私があなたの家を奪ったとおっしゃるのですか。いや、それは違います。私の屋敷は洛中にありますが、あなたの言われる辺りではありません。それは兄、教盛の所有となっていましたが、今はその子、通盛が住んでおります。元通りとはいえなくても、あなたと尊雅殿に良いように、なにか取り計らえるでしょう。」
「長い間、忠度様をお恨みして参りましたのに、違っていたのですね。」
「これでは、あなたに何も言えなくなってしまったなあ。今宵は月を愛でて、あなたの歌を聞いて過ごしましょうか。」
「もし私が屋敷の事をお話ししなければ、どうなさる積もりでしたの。」
晶子は、かすれた声で顔を伏せたまま聞いた。忠度は耐えられなかった。人より短く切りそろえ、高く根本を結った髪が顔を隠していたが、そっと指で払い、あごを上げさせた。晶子の赤い小さな唇が誘っていた。そっと口付けして、そのまま囁いた。
「こうしたかった。もっとあなたを知りたかった。でも、これは卑怯ですね。」
口付けの甘さに陶然として晶子は、忠度の胸に身をもむようにして抱かれた。すすり泣きのような吐息が漏れた。忠度は、自制心を失った。
「どうしてもこの唇、この髪、この指に触れてみたかった。晶子殿、先ほどの歌は本心です。舞姫のあなたであろうと、晶子殿であろうと、本心です。」
晶子は頷いた。車は北大路の広大な屋敷に着いた。忠度は晶子を誰にも見せたくなかった。寝殿の車寄せで晶子を抱き上げて、自分の部屋に運んだ。胸に伏せた晶子の髪の芳香が忠度の心を沸き立たせた。
晶子をそっと優しく慈しむのは、忠度にとっては無上の幸福であり、同時に苦しみだった。早くこの君に心行くまで喜びを与え、震える声で名をよばれたいと焦る気持ちと、幸福感の間で甘い苦悩を味わった。震える声で名を呼んだのは、忠度の方だった。
翌朝晶子の乱れた髪をそっと撫でながら、もう飢えが晶子を求めさせた。晶子は幸福と後ろめたさと恥じらいに悩ましく、それが忠度を更に煽った。
(お館はこの事を知っただろうか。)
「笑って下さい。そんな悲しい顔をしないで。もう私に飽きたのですか。」
忠度は晶子の気を引き立てるようにいう。儚げに笑って晶子が答えた。
「家の者にどういおうと考えているのです。きっと弟も心配しているでしょう。」
「尊雅殿なら、法親王様が傍に置きたいと仰せでした。後は尊雅殿がどうしたいかを決められるでしょう。それが今は一番良いと思います。まだあの一件は許されていませんから。」
「そうでしたか。そんな事を法親王様と話しておられたのですか。」

「愛するあなたを喜ばせるためならなんでもしますよ。」
「昨夜会ったばかりで簡単に愛といわれますのね。私には弟に責任があるのです。」
「それでこの美しい髪を切ってしまわれたのですか。今からは私がいます。どうか私を頼って下さい。今や私はあなたの僕ですよ。」
ほんのわずかな間、晶子は弟と家に関して背負ってきた責任を、全てを投げ出したい、ただの女に戻ってしまいたいと、一瞬思った。その時烏が鳴いた。晶子は、里を思った。薄墨のがっしりと逞しい姿が心に蘇った。忠度は晶子を誘惑したが、みやの信頼と安心感は薄墨の元にあった。
忠度の哀願を振り切って、迎えに来た弥太の車に乗り込んだ。悪びれず背を伸ばして、しっかりした足取りだった。
（忠度様、もうみやはお目にかかりません。晶子はあなたの傍にいます。）
忠度に残した言葉を、自分に繰り返して言い聞かせた。

⑥

薄墨は、この家のありとあらゆる物を壊し砕き、荒れ狂いたかった。重盛の最も大切な物を盗み出し破壊し、絶望の意味を教えてやりたかった。忠度に喪失がどんなに苦いかを教えてやりたかった。深夜宝物を集めた部屋に、薄墨の姿が闇からにじみでた。螺鈿細工の美しい箱には、幾巻もの経典が収めてあった。巻物には透き通った珠が嵌め込まれてあった。その美しい巻物を手にすると、次第に薄墨から怒りは鎮まり落ち着きが戻った。みやは忠度殿に従った。もう里に暮すみやではない。太郎も元の身分に戻れる。喜んでやらねばならない。それを受け入れて生きるしかない。透明な石がそう教えてくれた。
「中宮様がご懐妊なさったそうだ。先ほど殿の侍女たちが噂をしていた。」
「お家の栄華は続く事間違いなし。いやめでたい事だ。」
家人たちが宴会の残りの酒に酔い、口軽く語り合っていた。徳子中宮が懐妊したのなら、もうこの一族の栄華が続くと定まった。
翌朝早く戻ったみやを出迎えたのは、薄墨だった。みやは薄墨の顔を見る事ができなかった。
薄墨は、みやの手を掴んで引き寄せ、座らせて言った。
「俺は平忠正の末子、忠澄。忠度殿、重盛殿とは一族ながら敵同士だ。だが、あなたの敵の一族だとも言える。中宮徳子様が懐妊なさったそうだ。もう、私達の因縁は終わったのだ。みや、解ってくれないか。里で穏やかに暮らそう。里は充分豊かになった。尊雅殿は法親王様に預けたのだろう。みんな、みやのあなたが必要なのだ。俺にはみやしかいない。それはずっと前から知っていただろう。忠度殿の和歌と子供らの歌と、どっちをみなが喜んで聞いたと思う。今様と踊りに人々は熱狂していたではないか。気付かなかったはずはない。晶子殿は忠度殿の所に置いてきてくれ。元の里のみやに戻って帰ってくれないか。」
薄墨は一息に言い、みやを強い眼差しで射すくめた。俯いたみやの視線の先に薄墨の力強い手があった。みやは、ただ視線を落としているばかりだった。
「みやは初めて会ってから、一度も俺の本名を聞きもしなかった。俺もみやの本名を聞かないで

来た。あなたが晶子殿、太郎が尊雅殿といわれる事も、弥太から聞いた。いつか俺を信じて明かしてくれると待っていた。俺も晶子殿から見れば敵の片割れ。それで、あなたを失うのが怖かった。ただ、そんな事はどうでも良いとも思ってきた。ここに暮すみやと薄墨の俺達が真実なのだ。それだけで良いと思ったのだ。」

みやは言葉を失った。薄墨は、みやが黙ったままでいるのに耐えられず、家を出た。

（あなたが忠度様の従兄弟。私の半分は忠度様に惹かれ、半分は薄墨の忠澄殿に。どちらかを選べといわれても、今はできない。今は何も決められない。）

みやはその日の午後に家を出た。誰にも声を掛けなかった。退下された遠縁の斎院の宮を頼る積りだった。法親王の姉君であり、高名な歌人でもあった。その方以外今のみやに頼れる所はなかった。薄墨へ堅い信頼も、忠度に寄せた想いも真実だったが、そのどちらも選ぶ事が出来ない今、薄墨の元に居続ける事は、余りに恥知らずだ。と言って、忠度を頼る事はできない。薄墨との信義にもとる。

（夜をともにしておいて、お館への信義を今更問うのか、私は。）

どちらかを選ぶ事はできないならば、どちらも捨て去ろう。

弥太は、みやの昨夜の振る舞いに憤慨していたが、薄墨がとがめだてしない以上、自分の口出しするべき事ではないと、ただ気持ちを抑えて見守った。かつては薄墨の外泊にみやが心を痛めていた事も知っていた。よくある事だとは思うが、労しい気もしたものだ。しかし、今回はそれとは違う。忠澄でもある薄墨には、みやとは別に忠度との間に因縁があった。その上でみやとの事は薄墨が決める事だ。弥太はみやの行く先を知っておく事だけが今は大事だと思い、後をつけた。もし、忠度の屋敷に戻るならば、もうそれまでだ。

みやはそこへは行かず、京の西、斎院の宮の屋敷に入った。弥太はいつも忠澄のただ一人の家臣として、それに忠実だった。

その後、平家の一族には重盛が親に先立つという不幸もあったが、中宮徳子は親王を生み、親王はわずか二歳で位に就き、平氏の世は安泰に見えた。

⑦

月は煌々と都を照らしていた。忠度主従は合わせて五騎。人目を避けて師の俊成の屋敷を訪ねた。精一杯に生きた証に師の編纂する勅撰集に一首でも採取してもらいたいと、命がけで都に戻ったのだった。師の俊成は快く引き受けてくれた。

「薩摩守殿、お渡ししたい文があります。八の宮の姫君から預かりました。」

忠度は灯りの元で、懐かしい晶子の手跡を見た。

（思い出だし候や。）

（忘れねばこそ、思い出ださず候え。）と、忠度は返事を書いた。

（この流浪の日々にあなたとの一夜だけが、生きる拠り所でした。片時も忘れる事がないのに、思い出す事はできません。いつもいつまでもあなたの事を思っています。）

返事を書き記し、師の俊成に預けた。深い感謝を込めて別れを告げた。今生で会う事のない人、

手にする事のない名誉のために危険を冒したが、その価値はあった。心の中に晶子の言葉が響いて繰り返していた。
（私を思い出してくれる事がありますか。私があなたを思う程に、あなたは思ってくれますか、私の事を。あの日の出会いと別れの辛さを。）
忠度は晶子の文を鎧の奥に忍ばせ、月に照らされて都を落ちた。あの日を忘れねばこそ、思いだす事はない。いつもあなたを想っていると、晶子に伝えられた。それで満足だった。人生が和歌を予言するのか。和歌が忠度を導くのか。在りし日の晶子の舞い姿が蘇った。

――　いずこかとまり　野原篠原　―

⑧

平氏は滅びた。忠度はそれを見る事なく戦場で果てた。
忠度の死を聞いたみやは、春浅い日の午後、薄墨の待つ里に戻った。里山には柿の実が残っていた。大きな柑子の実もまだあった。いつの世にも変らぬ物があると、みやに戻った晶子は思った。
（初めて会った時に、お館は小刀で柿を小さく切ってくれた。）
里に近づくと、子供達の歌声が聞えた。

――　舞え舞えかたつぶり　舞わぬものならば　馬の子や牛の子に蹴ゑさせてん
踏みやらせてん　まことに美しゅう舞うたらば　花の園まで遊ばせん。――

昔、太郎と薄墨とともに暮した家は、少しも変っていなかった。
縁先に座っていた薄墨は、みやを認めると、「戻ったか。」と、言った。
暖かな声だった。
（この方もまた変らないのだ。いつも、初めてあった日からずっと。）